

10. 大腸ポリペクトミー50症例の検討

篠 諭司, 大野孝則, 金子良一
光永裕子, 古瀬純司, 仲野敏彦
常富重幸, 野口武英, 伊藤文憲
本村八恵子

(社会保険船橋中央)

大久保春男 (同・病理)

最近2年間の大腸ポリペクトミー50症例の臨床的検討を行った。年齢は27歳から81歳(平均57歳)で, 男性に多かった。摘出したポリープの総数は81個で, 1症例当たりのポリペクトミーの個数は1~5個(平均2個)であった。症例の20%に m 癌が見られ, ポリープ径が大きくなるほど m 癌の頻度が高くなり, 15mm 以上では1/3を占めた。鉗子生検と摘出組織では所見の不一致がみられ注意を要する。便潜血反応は早期大腸癌のスクリーニングとして有意義であった。

11. 当院における大腸内視鏡検査の現状, 91年度

平野康之, 山田 暁, 早坂 彰
桜井 渉 (君津中央)

91年度, 当院において施行された大腸内視鏡検査620例(男性353例, 女性267例, 平均年齢54.2才)について検討した。疾患別ではポリープ181例, 大腸癌21例, 腺腫内癌5例, 炎症性腸炎79例, 潰瘍性大腸炎14例であった。ポリープの解剖学的分布はS状結腸に38.2%と最も多く, 既報告と同様であった。グループ3以上の病変の20%が深部結腸で認められており, 積極的な total colonoscopy の施行が望ましいと考えられた。

12. 血管造影が診断に有用であった腹部腫瘍の2例

石原 武, 江畑稔樹, 田口喜代継
田口忠夫, 岩間章介, 石原 運雄
加藤繁夫 (千葉労災)
真田正雄, 志村賢範, 塚本 剛
鈴木 秀 (同・外科)
今野暁男 (同・病理)

血管造影検査は, 腫瘍の支配血管を造影することにより原発臓器の同定が可能であり, 質的診断, 浸潤範囲, 腫瘍径の検索に有用である。当院で経験した腹部腫瘍の2例(症例1:回腸原発滑筋肉腫。症例2:肝外発育型肝細胞癌)は, いずれも原発臓器の特定が困難で, 特に症例2は正常肝(B型, C型肝炎ウィルスマーカー陰性)に原発しており, 血管造影が診断にきわめて有用であった。

13. 新しい癌患者 QOL 測定法の試み

鈴木紀彰, 福山 悦男, 高田博文
森 博道, 川口新一郎, 神田芳郎
湯村保夫, 飯島勝矢 (君津中央)
栗原 稔

(昭和大学豊洲病院・消化器科)

今回われわれは, 患者の quality of life (以下 QOL と略す) 調査表の作製とその妥当性の検討を行ったので報告する。まず QOL 調査表を作製するために, 医療関係者と病名告知を受けている癌患者に2回の予備調査を施行し調査表原案を作製した。ついで患者を対象に2回の調査を施行し項目数を削減し, 最終案作製作業を行っている。調査表を作る際は妥当性および信頼性の検討が必要だが, 今回君津中央病院の症例で妥当性について検討するために QOL 調査表, European Organization for Research and Treatment of Cancer (以下 EORTC と略す) の調査表, および Self-rating Depression Scale (以下 SDS と略す) を同時に解答してもらった。その結果 EORTC とは正の, また SDS とは負の相関関係を認めた。以上より私達が作成した QOL 調査表は妥当性を持つことが証明された。また個々の症例の状態の把握にも使用できる可能性が示唆された。

14. 当院における A 型肝炎ワクチン接種前後の抗体価の変化について

藍 寿司, 哇元亮作

(県立鶴舞)

40才未満の HA-Ab (-) の健康者54人を筋注・皮下注群に分け, 乾燥組織不活化A型肝炎ワクチン(DCK-171) 0.5 μ g を2回(2週間隔)接種し, HA-Ab を接種終了後4週目に測定した。性別, 接種方法, 副作用の有無で抗体価に差はなく, 陽転率100%を示しきわめて有用と考えられたが, 両群とも副作用の発現頻度が高く改善が望まれた。

15. 成人感染からキャリア化し発癌したと推定される B 型肝炎の1例

林 直諒

(国立横浜臨床研究部)

星野和彦, 小松達司 松島昭三

(同・消化器科)

26才, 看護婦でB型肝炎に罹患し, HB ウィルスキャリアに移行し, 32才で第2子出産後, 33才で sero-conversion をきたしたものの, 36才で肝細胞癌の発生を